

651 ^{201}Tl -SPECT像による脳疾患診断の医師間変動
本田憲業、町田喜久雄、井上優介（埼玉医大医療科・放）、
松本 徹、飯沼 武（放医研・臨床）、村田 啓、丸野
広大（虎ノ門病院・放）、宇野公一、今井康則、小熊栄二
（千葉大・放）、久保敦司、塚谷泰司（慶大・放）、石
井勝巳、西巻 博（北里大・放）、油井信春、戸川貴史
（千葉県がん科・放）、川上憲司、森 豊（慈恵医大・放）
小山田日吉丸（癌研・アイト-7）

最初、9人の核医学専門の医師が三角カメラ形断層装置で撮像した脳疾患患者50例の ^{201}Tl -SPECT像を読影し、次にMRIを追加してSPECT像を再読影した。神経学的所見、剖検、手術、CT等のすべての情報を総合して決めたゴールドスタンダードと読影実験の結果を比較し、各医師の所見検出能および脳疾患の鑑別診断能をあらわすROC曲線を求めた。 ^{201}Tl 脳疾患診断基準の標準化に役立てるため、診断能の医師間変動について解析した。